

上細井北遺跡群No.2

上細井土地改良区営上細井土地改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2010.3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

上細井北遺跡群 No.2



古子塚古墳

2 0 1 0 . 3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

は じ め に

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所に人々の息吹を感じられる歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野の国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王庵寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され、日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する上細井北遺跡群№2は上細井土地改良区管上細井土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査であります。今回の調査では、古墳2基をはじめとして、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡4軒を検出いたしました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や上細井土地改良区の役員、地元関係者の方々など各方面のご配慮の結果といえます。また、寒風の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成22年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長 戸塚 良明

例　　言

1. 本報告書は、上細井土地改良区管轄上細井土地改良事業に伴う上細井北遺跡群No.2の発掘調査報告書である。
2. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

調　　査　　場　　所　　群馬県前橋市上細井町418番地1　他
発　　掘　　調　　査　　期　　間　　平成21年7月1日～平成21年8月6日
整　　理・報　　告　　書　　作　　成　　期　　間　　平成21年12月22日～平成22年2月26日
発　　掘・整　　理　　担　　当　　者　　阿久澤真一・並木勝洋（発掘調査係員）
4. 本書の原稿執筆・編集は阿久澤・並木が行った。なお、VIIは右島和夫氏（前橋市文化財整備指導員）に寄稿していただいた。
5. 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

阿部シゲ子・大木伸二・佐藤佳子・杉村富雄・閑根その子・瀧上政信・町田妙子・町田敏彦・真庭武志・峰岸あや子
6. 発掘調査で出土した遺物は、当発掘調査団より前橋市教育委員会に保管を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1. 指図中に使用した北は、座標北である。
2. 指図に国土地理院発行の1：200,000地形図（宇都宮・長野）、1：25,000地形図（前橋・渋川）、1：5,000前橋市現形図を使用した。
3. 遺跡の略称は、21B17である。
4. 道構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

J…縄文時代の堅穴住居跡　H…古墳・奈良・平安時代の堅穴住居跡　M…古墳　W…溝跡　D…土坑
P…ピット・貯蔵穴（住居内P 5 を貯蔵穴とした。）
5. 道構・遺物の実測図の縮尺は、原則的に次のとおりである。その他、各図スケールを参照されたい。

道構　　全体図…1/400　　住居跡・溝跡・土坑・ピット…1/30、1/60、1/120　　竪断面図…1/30
遺物　　土器…1/3　　石器・石製品…1/2、1/3
6. 計測値については、（ ）は現存値、〔 〕は復元値を表す。
7. セクション注記の記号は、縦まり・粘性の順で示し、それぞれ以下のように表現する。

○非常に縦まり・粘性あり、○縦まり・粘性あり、△縦まり・粘性ややあり、×縦まり・粘性なし
なお、セクション注記と遺物観察表の色調について新版標準土色帳（小山・竹原 1967）を基準とした。
8. 道構平面図の———は推定線を表す。
9. スクリーントーンの使用は、次のとおりである。

道構断面図　構築面…
遺物実測図　須恵器断面…
10. 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B　（浅間B鉱石：供給火山・浅間山、1108年）
Hr-FP　（FP テフラ層：供給火山・榛名山、6世紀中葉）
Hr-FA　（FA 火山灰層：供給火山・榛名山、6世紀初頭）
As-C　（浅間C鉱石：供給火山・浅間山、4世紀前半）

目 次

序

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と環境	
1	遺跡の立地	1
2	歴史的環境	1
III	調査の方針と経過	
1	調査方針	6
2	調査経過	6
IV	基本層序	9
V	遺構と遺物	10
VI	まとめ	13
VII	前橋市上細井地区の古墳について	15

表 目 次

Tab. 1 上細井北遺跡群周辺遺跡概要一覧	5
2 穴住居跡一覧表	11
3 道路状遺構計測表	11
4 土坑計測表	11
5 繩文時代出土土器観察表	12
6 古墳・奈良・平安時代出土土器観察表	12
7 石器・石製品観察表	12
8 「上毛古墳綜覧」に掲載されている上細井地区の古墳	17

挿 図 目 次

Fig. 1 上細井北遺跡群位置図	2
2 周辺遺跡図	4
3 グリッド設定図、M-1・2号古墳想定図	7
4 上細井北遺跡群No.2全体図	8
5 基本層序	9
6 M-2号古墳想定図	14
7 丑子塚古墳埴丘復元図	15
8 上細井丑子塚古墳群分布図	16
9 丑子塚古墳全体図	18
10 丑子塚古墳と上細井北遺跡群No.2位置図	19
11 H-1～4号住居跡、A-1号道路状遺構	20
12 M-1号古墳、S-1号集石土坑	21
13 M-2号古墳平面図	22
14 M-2号古墳セクション図	23
15 繩文土器、石器・石製品、H-3・4号住居跡・M-2号古墳出土遺物	24

図 版 目 次

PL. 1 H-1～4号住居跡、S-1号集石土坑、M-1号古墳	
2 M-2号古墳遺物出土状況	
3 M-2号古墳全景	
4 調査区北部全景、調査区南部全景、H-3号住居跡出土遺物、繩文土器	

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、上細井土地改良区管上細井土地改良事業に伴い実施された。該当地は周知の埋蔵文化財包蔵地（東田之口遺跡、丑子遺跡、上細井五十嵐遺跡）である。

平成21年5月27日付けで上細井土地改良区 理事長 長谷川 富雄より前橋市教育委員会に上細井土地改良区管上細井土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が提出された。前橋市教育委員会ではこれを受け、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 戸塚 良明に対し、調査実施について協議を行い、調査団はこれを受諾した。平成21年6月24日、調査依頼者である上細井土地改良区 理事長 長谷川 富雄と前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 戸塚 良明との間で、本発掘調査の委託契約を締結し、7月1日に現地での発掘調査を開始するに至った。

なお、遺跡名称「上細井北遺跡群№2」（遺跡コード：21B17）の「上細井北遺跡群」は上細井土地改良区管上細井土地改良事業区域内の遺跡を総称し、数字の「2」は過年度に発掘調査を実施した遺跡と区別するために付したものである。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地の利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という4つの地域に分けられる。

本遺跡の位置する前橋市上細井町は、前橋市の中心市街地から北東へ約4kmの地点にあり、主要地方道前橋・赤城線が西から東流している大正用水と交差する地点から東へ約700mに所在し、赤城火山斜面の下端部と広瀬川低地帯の接点付近にある。この町の周りには、東に鳥取町、北に勝沢町・富士見町時沢、西に龍藏寺町、南に下細井町がある。また、現在、遺跡地の中央を通過する一般国道17号（上武国道）改築工事の施工に伴って、群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が行われている。遺跡地の周辺は赤城山麓に源を発する小河川が付近を南流し、部分的に開析谷を形成し舌状台地と谷地部を作っている。谷と谷の間の丘陵性の台地は畠地として利用され、谷地部では水田が営まれている。

2 歴史的環境

本遺跡の位置する赤城山南麓斜面の台地には、旧石器時代後期から中近世に至る数多くの遺跡が存在し、埋蔵文化財の宝庫として知られている。上細井町においても、縄文時代から中世頃までの土器の散布状況や遺構の確認、調査などが古くから行われている。主な調査済みの遺跡をあげると、Fig. 2 の 2～10が包蔵地として記載され、古墳時代の住居跡が検出された田之口遺跡。繩文・弥生時代の土器片が出土した西田之口遺跡。石組竈の住居跡が検出された丑子遺跡。土器片と磨製石斧が発見された天王遺跡。繩文中期と後期の土器片の出土した天間久保遺跡。繩文中期・後期、古墳時代の土器片が出土した灰俵、南灰俵遺跡。古墳時代の土器片が出土した定福遺跡など、遺跡が密集していることがわかる。

また、前橋市教育委員会が近隣で発掘調査を実施したものは、本調査区の南に位置する南田之口遺跡及び北に位置する勝沢田之口遺跡があげられる。南田之口遺跡からは古墳時代の住居跡等が検出され、勝沢田之口遺跡からは奈良・平安時代の住居跡、中・近世の溝跡等が検出されている。

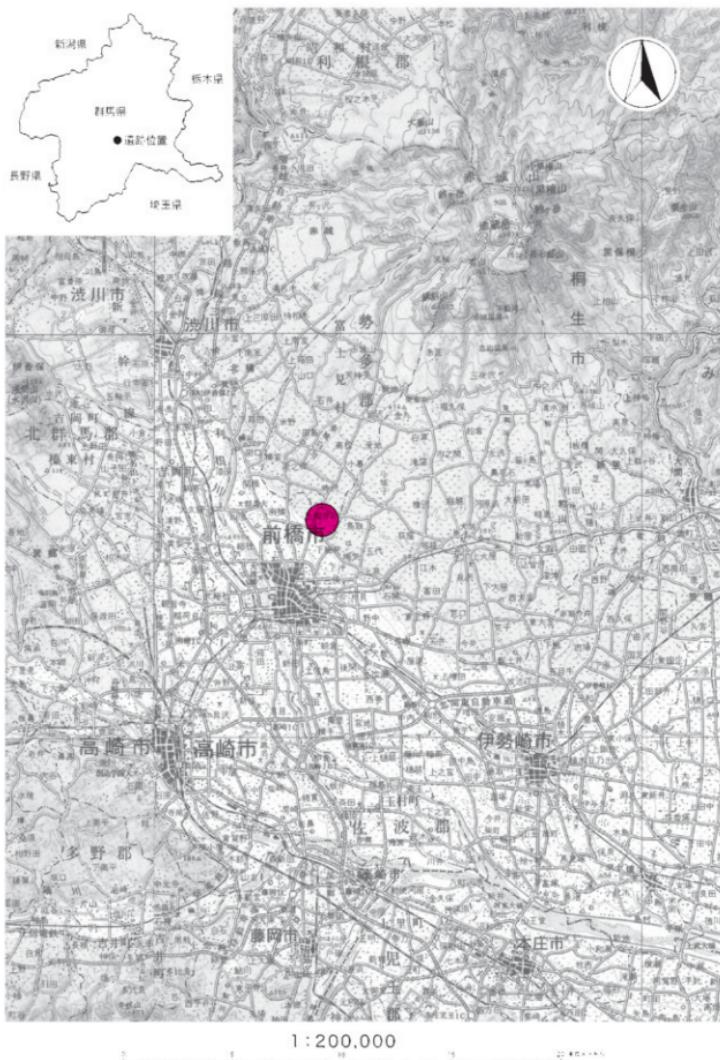


Fig. 1 上細井北遺跡群位置図

その他にも、本調査区の東に位置する芳賀団地遺跡群（芳賀北部団地遺跡、芳賀西部団地遺跡、芳賀東部団地遺跡）、鳥取福蔵寺II遺跡、五代南部工業団地造成に伴う遺跡等があげられる。

芳賀北部団地遺跡は縄文時代前期・後期の堅穴住居跡、中期の敷石住居跡が検出された。また、奈良・平安時代の堅穴住居跡が多數検出され、戦国期の勝山城址も確認された。芳賀西部団地遺跡では縄文前期の住居跡、埴輪棺等のはか古墳縒覧記載漏れの古墳32基が集中して検出され、初期群集墳であることがわかった。芳賀東部団地遺跡では縄文前期の住居跡60軒、中期木葉と後期前半の敷石住居6軒、古墳4基、奈良・平安時代の住居跡約500軒。掘立柱建物跡206軒などが検出された。

鳥取福蔵寺II遺跡では、約13,000年前に堆積した浅間黄色軽石層下の関東ローム層中より旧石器が検出された。細石刃文化石器群と認められるだけでも約350点検出された。器種も細石核、細石刃、スキー状削片、彫刻刀型石器、削器、撲器、礫器など多岐に及んでいる。また、縄文時代前～後期の住居跡、古墳～奈良・平安時代の住居跡等も検出されている。

五代南部工業団地造成に伴う遺跡では、縄文時代前・中期の住居跡・土坑、古墳～奈良平安時代の住居跡が多數検出されている。

中世以降も勝沢町字番城に築かれた勝沢城跡をはじめとする多くの城跡や砦跡が築かれるようになり、本遺跡の位置する赤城山南麓斜面は、旧石器時代の終わりから縄文、古墳、奈良・平安時代、中・近世の遺構が検出されており、この地における連続とした人々の歩みをみることができる。本遺跡は、そのただ中に位置しており、古代の人々の生活を知るうえで貴重な資料を私たちに提示している。

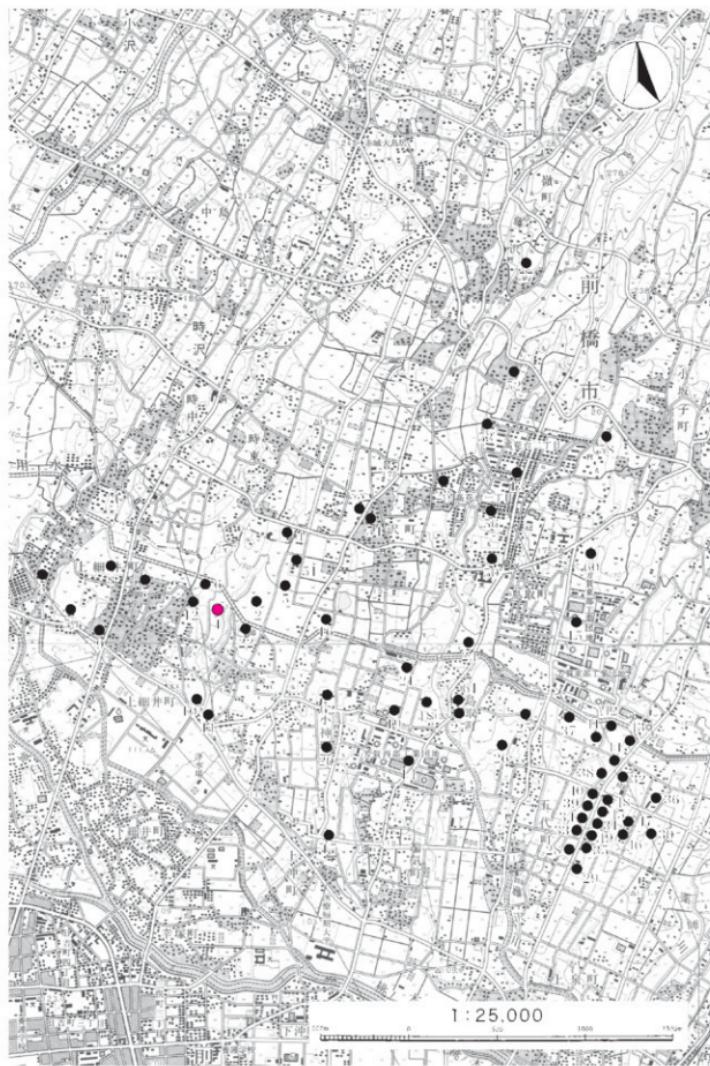


Fig. 2 周辺遺跡図

Tab. 1 上総井北遺跡群周辺遺跡概要一覧表

No	遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・出土遺物
1	上総井北遺跡群No.2	2009	本遺跡
2	上総井北遺跡群No.1	2008	縄文：住居跡、古墳：古墳・住居跡、奈良・平安：住居跡
3	上総井北高岡山古墳		古墳：円墳・石製模造器具（機械具等）
4	田之口遺跡		古墳：住居跡
5	西田之口遺跡		縄文：弥生：土器片
6	佐子遺跡		石組築をもつ土器窯使用の住居跡
7	天王遺跡		縄文：土器片
8	天間久山遺跡		縄文：中・後期土器片
9	楽師遺跡		縄文：中期土器片、古墳：後期土器片
10	灰伏遺跡		縄文：中・後期土器片、古墳：土器片
11	南灰伏遺跡		縄文：土器片、古墳：土器片
12	定福遺跡		古墳：土器片
13	芳賀北配石遺跡	1973・74	縄文：住居跡・配石遺構、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・製鉄遺構・溝跡
14	芳賀西配石遺跡	1975	縄文：住居跡・配石遺構、古墳：古墳・埴輪棺
15	芳賀東配石遺跡	1976・80	縄文：住居跡・配石遺構、古墳：古墳・住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡
16	小神明跡群Ⅰ	1982	縄文：住居跡、奈良・平安：住居跡
17	瑞氣遺跡群Ⅰ・Ⅱ	1982・83	縄文：住居跡、方形周溝墓、古墳：住居跡
18	小神明跡群Ⅱ 西田遺跡	1983	縄文：住居跡、古墳：住居跡・円墳・帆立貝式古墳
19	貞木遺跡	1983	弥生：住居跡
20	小神明跡群Ⅱ 大明神遺跡	1983	古墳：住居跡
21	小神明跡群Ⅱ 九糸遺跡	1983・85	縄文：住居跡、古墳：住居跡・掘立柱建物跡、奈良・平安：住居跡
22	南田之口遺跡	1985	縄文：土坑・古墳：住居跡、近世：調跡
23	芳賀北曲輪遺跡	1990	縄文：住居跡・配石遺構、古墳：古墳
24	芳賀北高岡山遺跡	1991	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡
25	鳥取東原山遺跡	1997	古墳：住居跡、近世：埋葬施設
26	鳥取縣守道跡	1997	縄文：住居跡、古墳～平安：住居跡・土坑・掘立柱建物跡・井戸跡
27	鳥取郡嚴寺II遺跡	1998	旧石器：細石刃文化石器群、縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱遺構・鍛冶工房跡
28	五代江ノ原敷道跡	2000	縄文：土坑・古墳：住居跡・方形周溝墓、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・中世：溝跡
29	五代木祖I遺跡	2000	縄文：住居跡・配石遺構、古墳：住居跡・奈良・平安：掘立柱建物跡・中世：溝跡
30	五代木祖II遺跡	2000	縄文：配石・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・中世・近世：溝跡
31	五代竹内遺跡	2000	縄文：住居跡、古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・近世・現代：溝跡
32	五代深堀I遺跡	2000	縄文：住居跡、奈良・平安：住居跡
33	五代伊勢宮I遺跡	2000	古墳：奈良・平安：住居跡・中世：近世：調跡
34	五代伊勢宮II遺跡	2001	縄文：住居跡、古墳～奈良・平安：住居跡、近世：溝跡
35	五代伊勢宮II遺跡	2001	古墳：奈良・平安：住居跡・中世：近世：溝跡
36	五代深堀II遺跡	2001	縄文：住居跡、古墳～奈良・平安：住居跡
37	五代中原I遺跡	2001	縄文：住居跡、古墳～奈良・平安：住居跡
38	五代伊勢宮IV遺跡	2001	縄文：住居跡・土坑・奈良・平安：住居跡
39	五代伊勢宮V遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳～奈良・平安：住居跡・中世・近世：溝跡
40	五代伊勢宮VI遺跡	2002	縄文：住居跡・土坑・古墳～奈良・平安：住居跡・鍛冶工房跡
41	五代中原II遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳：住居跡
42	五代中原III遺跡	2003	古墳：住居跡・土坑
43	五代山街道I遺跡	2003	縄文：住居跡・土坑・古墳：住居跡・平安：住居跡・掘立柱建物
44	五代山街道II遺跡	2003	縄文：土坑
45	五代竹内II遺跡	2003	縄文：住居跡・土坑・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物
46	五代木祖II遺跡	2003	古墳：奈良・平安：住居跡・掘立柱建物・溝跡
47	五代木祖II遺跡	2004	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物・中世：溝跡
48	五代深堀II遺跡	2004	縄文：住居跡・土坑・溝跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物
49	五代伊勢宮遺跡(1)	2006	縄文：住居跡・土坑・古墳～奈良・平安：住居跡
50	鳥取桑城跡	2007	縄文：土坑・中世：溝跡
51	勝沢田之口遺跡	2007	奈良・平安：住居跡・中世：溝跡

○その他の既認定跡

- 52 桂正田高塚古墳 53 東会田古墳 54 オブ稼古墳 55 オブ稼西古墳 56 駒託城跡 57 領城跡 58 小板子城跡 59 八幡山の谷遺跡
60 児替戸の堀跡 61 鳥取の堀跡 62 小神宮の堀跡

III 調査方針と経過

1 調査方針

委託された調査箇所は、上細井土地改良区宮上細井土地改良事業に伴い築造予定の道路用地であるため、幅5mの極めて狭長なトレンチ状の調査区となっている。総調査面積は1,200m²である。

グリッド座標については国家座標（世界測地系）X = 47440.000m・Y = -66840.000を基点（X 0・Y 0）とする4mピッチのものを使用し、西から東へX 1、2、3…、北から南へY 1、2、3…と付番し、グリッド呼称は北西杭の名称を使用した。

本遺跡のX 0・Y 100の公共座標は以下のとおりである。

世界測地系	X = 47440.000	Y = -66840.000
緯 度	36°25'17"90837	経 度 139°05'16"65269
子午線収差角	0°26'33"22	増 大 率 0.99995503

調査方法については、表土掘削・遺構確認・方眼杭等設置・遺構掘下・遺構精査・測量・全景写真の手順で行うこととした。このうちの遺構確認については、基本的にAs-C-Hr-FA軽石が混入する土層を手がかりにした。

図面作成は、平板・簡易造り方測量を用い、遺構平面図は原則として1/20、住居跡は1/10の縮尺で作成した。遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録を記載しながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納し、重要遺物については分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。

2 調査経過

本遺跡の発掘調査は、平成21年6月24日に調査委託を締結し、7月1日より現地調査を開始した。調査区南部から重機掘削を開始し、それと平行して鎌鋤による遺構確認を行った。7月10日に方眼杭打ちとベンチマークの設定を行い、その後の遺構掘り下げに入った。調査区北部・南部は遺構確認面が浅く、遺構の残存状況は芳しくなかった。精査の結果、竪穴住居跡4軒、古墳周堀2条、集石土坑1基を検出した。7月29日に全景写真撮影を行い、7月31日からは縄文面の確認のためにトレンチを設定して重機掘削を行ったが、遺構は検出されなかった。

8月6日に測量を行い、現場での作業は終了した。

12月22日より文化財保護課宁舎に戻り、出土遺物・図面・写真等の整理作業及び報告書作成にあたり、翌年2月26日までに全ての作業を終了した。

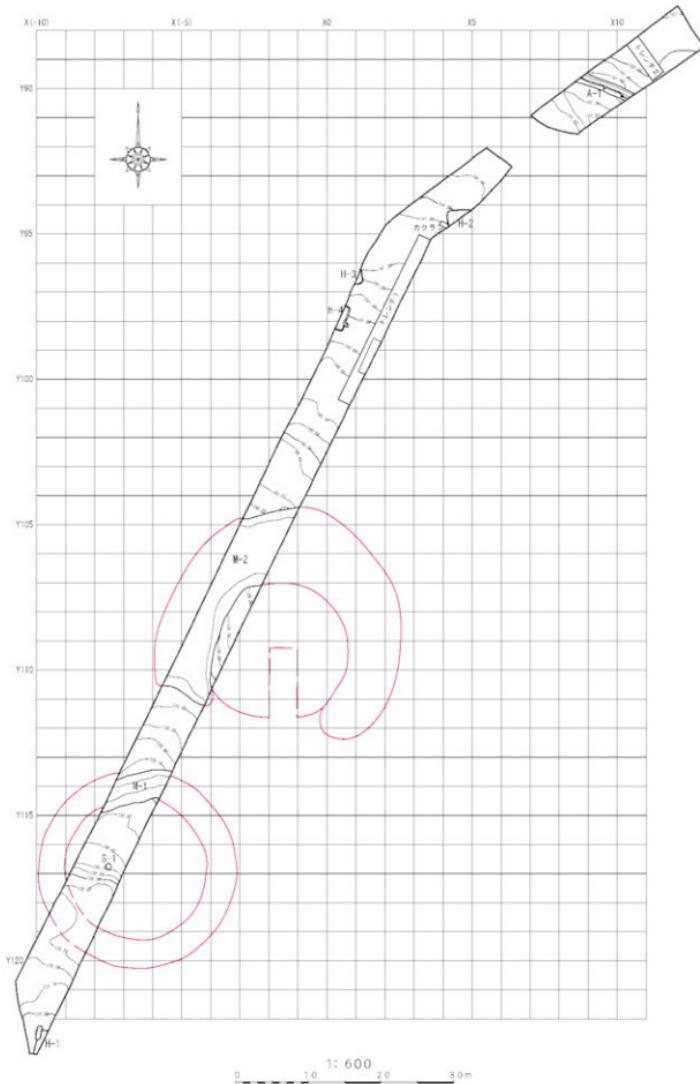


Fig. 3 グリッド設定図、M-1・2号古墳想定図

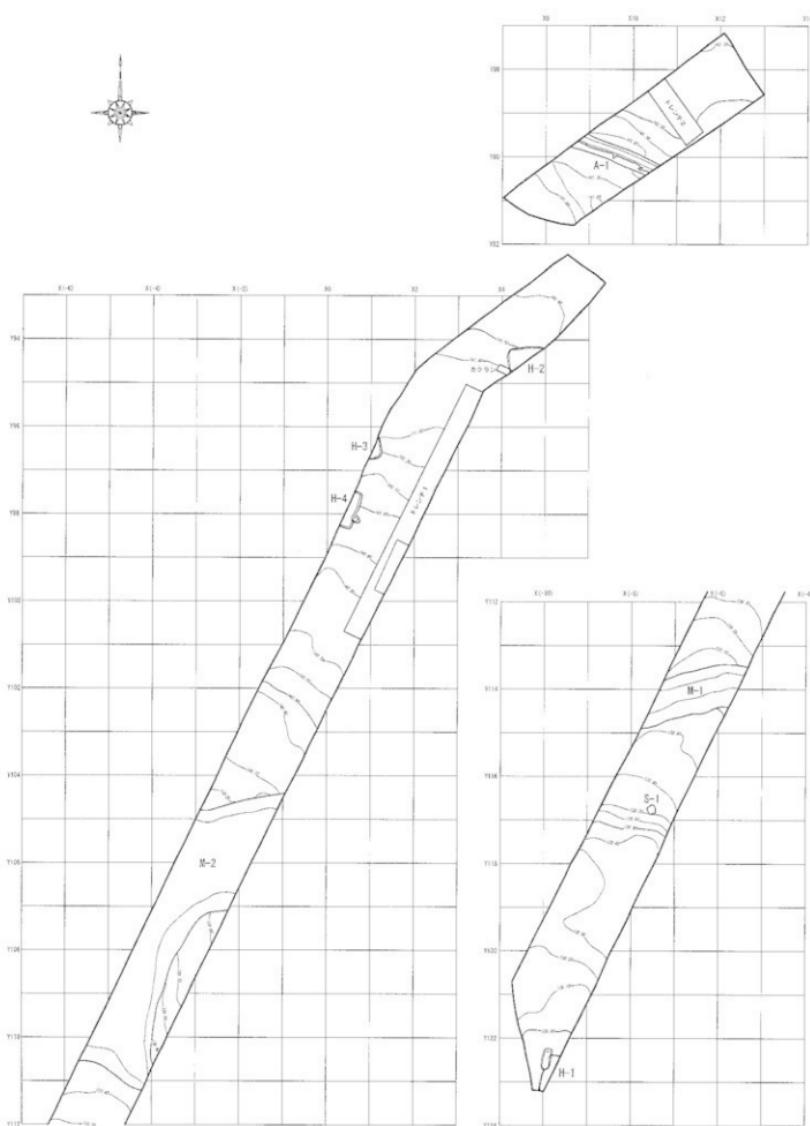
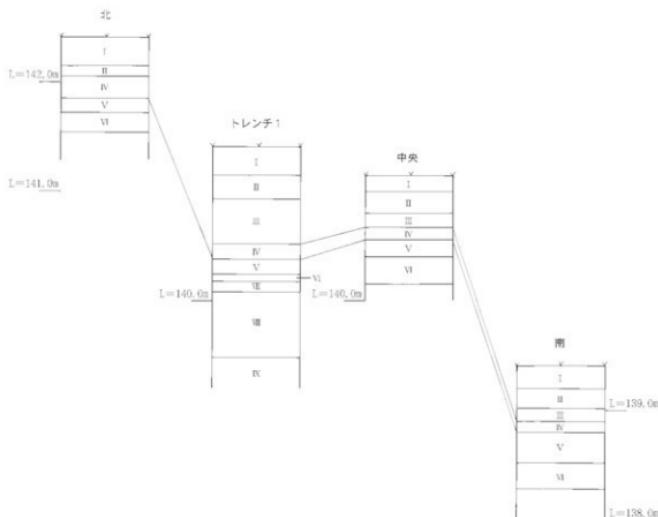


Fig. 4 上細井北遺跡群No 2 全体図

1 : 400

IV 基本層序



基本層序

I	現耕作土	
II	灰黃褐色 (10YR4/2)	黃色輕石 ($\phi 1\text{ mm}$) 1%
	縹り×	
III	黑褐色 (10YR3/2)	黃色輕石 ($\phi 1\text{ mm}$) 3% 白色輕石 ($\phi 1\text{ mm}$) 1% ローム粒子
	縹り×	
IV	灰黃褐色 (10YR4/2)	黃色輕石 ($\phi 1\text{ mm}$) 1% ローム粒子
	縹り△ 粘り△	
V	にぶい黃褐色 (10YR4/3)	ロームブロック混土 (ロームブロック 3%) ローム粒子
	縹り△ 粘り△	
VI	にぶい黃褐色 (10YR4/3)	V よりロームブロック多い (10%)
	縹り○ 粘り○	
VII	にぶい黃褐色 (10YR4/3)	灰色のスコリア 白色輕石 ($\phi 1\text{ mm}$) 1%
	縹り○ 粘り○	
IX	明黃褐色 (10YR6/6)	白色輕石 ($\phi 2 \sim 3\text{ mm}$) 10% 黃色輕石少し
	縹り○ 粘り○	
X	明黃褐色 (10YR6/6)	水成ローム 白色・黃色輕石少し
	縹り○ 粘り○	

Fig. 5 基本層序

V 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig. 8、PL. 1)

位置 X-11°-10'、Y122°-123グリッド 主軸方向 N-105°-E 規模 長軸[3.50]m、短軸[1.18]m、壁現高12.0cm。面積 [3.51]m² 床面 平坦であるが、硬化面なし。出土遺物 総数6点。時期 不明。

H-2号住居跡 (Fig. 8、PL. 1)

位置 X 4°、Y94グリッド 主軸方向 N-82°-E 規模 長軸[3.50]m、短軸[2.20]m、壁現高46.0cm。面積 [3.99]m² 床面 平坦な床面。出土遺物 総数51点。時期 不明。

H-3号住居跡 (Fig. 8・12、PL. 1・4)

位置 X 0°-1°、Y96グリッド 主軸方向 N-79°-E 規模 長軸[2.00]m、短軸[1.30]m、壁現高は42.5cm。面積 [1.24]m² 床面 平坦な床面。出土遺物 総数17点。そのうち土師小甕3点、縄文土器1点を図示。時期 覆土や出土遺物から5世紀中頃から後半と考えられる。

H-4号住居跡 (Fig. 8・12、PL. 1)

位置 X 0°、Y97°-98グリッド 主軸方向 N-112°-E 規模 長軸(3.54)m、短軸[1.08]m、壁現高39.0cm。面積 [3.14]m² 床面 平坦な床面。竈 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-123°-E。全長86cm、最大幅70cm、焚口部幅30cm。構築材に粘土を用いる。出土遺物 総数27点。そのうち須恵器壺1点・蓋1点を図示。時期 覆土や出土遺物から9世紀中頃から後半と考えられる。

(2) 古墳

M-1号古墳 (Fig. 9、PL. 1)

位置 X-8°～-6°、Y113°-114グリッド 平面形状 南側が削平されたため全体の形状は不明であるが、20m程度の円墳であると考えられる。周堀 調査によって検出された長さは8.35mである。最大幅は4.95mであり、深さは45cmである。断面形状は幅広で緩やかに立ち上がる。出土遺物 縄文土器74点、土師器35点、須恵器11点、石製品17点、総数137点。そのうち石製品2点、縄文土器1点を図示。時期 覆土や遺物に埴輪がないことから7世紀代と考えられる。

M-2号古墳 (Fig. 10・11、PL. 2・3)

位置 X-6°～-1°、Y104°-111グリッド 平面形状 南側前面部が開く馬蹄形状の周堀を持つ20m程度の円墳であると考える。周堀 調査によって検出された最大幅は11.60mであり、深さは43cmである。断面形状は幅広で立ち上がりは緩やか。出土遺物 縄文土器98点、土師器12点、須恵器99点、石製品40点、鉄器1点、陶器1点、総数251点。そのうち須恵器大甕1点、縄文土器2点を図示。時期 覆土や遺物に埴輪がないことから7世紀代と考えられる。

(3) 道路状遺構

A-1号道路状遺構 (Fig. 8、PL. 4)

位置 X 8~10、Y 89・90グリッド 主軸方向 N-69°-W 長さ [7.30]m 最大幅 0.70m 最小幅 0.25m 深さ 8.5cm 出土遺物 なし。時期 不明。

(4) 土坑 (Fig. 9・12、PL. 1・4)

土坑については、Tab. 4・5 土坑計測表を参照のこと。遺物総数13点出土。そのうち縄文土器1点を図示。

(5) グリッド等出土遺物 (Fig. 12、PL. 4)

総数510点出土。そのうち瓦質内耳鍋1点、縄文土器5点を図示。

Tab. 2 穴穴住居跡一覧表

遺構名	位置	規模 (m)			面積 (m ²)	主軸方向	窓		周溝	主な出土遺物		
		長軸	短軸	壁高 (cm)			位置	構築材		土器類	頭部器	その他
H-1	X 11・10 Y 122・123	[3.50]	[1.18]	12	3.51	N-105°-W	—	—	—	・	・	・
H-2	X 4 Y 94	[3.50]	[2.20]	46	3.99	N-82°-W	—	—	—	・	・	・
H-3	X 0・1 Y 96	[2.00]	[1.30]	43	1.24	N-79°-E	—	—	—	小甕	・	縄文土器
H-4	X 0 Y 97・98	[3.54]	[1.08]	39	3.14	N-112°-E 東壁南寄り	粘土	—	—	坪・蓋	・	・

Tab. 3 道路状遺構計測表

遺構名	位置	長さ (m)	深さ (cm)		上幅 (cm)		下幅 (cm)		主軸方向	断面形	時期
			最大	最小	最大	最小	最大	最小			
A-1	X 8~10 Y 89・90	7.30	8.5	3.0	84.0	72.0	26.0	14.0	N-69°-E	逆台形	不明

Tab. 4 土坑計測表

遺構名	位置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	出土遺物	備考
S-1	X 8 Y 116	76	74	14.0	円形	縄文土器 4	—

Tab. 5 繩文時代出土土器觀察表

番号	出土遺構附位	器種名	①②目録 ③既往		①胎土 ②色調 ③焼成度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	曲考
			④	⑤				
鰐1	H-3 覆土	深鉢	①—	②(5.2)	①細粒 ②良好 ③にぼい	波状口縁波頭部。口縁に沿って平戻竹管による平行波紋を2条並せて上：下位を区画。上位：波紋間に浅い凹窪を施す。中位：弱い割突文。下位：欠缺。	調査	
			③—	—	④口縁片			
鰐2	M-1 覆土	深鉢	①—	②(4.9)	①粗粒 ②良好 ③明赤褐 ④口縁片	平戻竹管による斜位の平行波線を施す。その後、交差するよう逆走位の平行波線を施す。小さい耳状鉢底、大口のボタン状粘土を貼す。	調査 c	
			③—	—	④口縁片			
鰐3	M-2 覆土	深鉢	①—	②(2.3)	①細粒 ②良好 ③にぼい	口縁部無文帶。頸部に刻文す。その面下に波線文。	云箇々台	
			③—	—	④口縁片			
鰐4	M-2 覆土	深鉢	①—	②(3.7)	①粗粒 ②良好 ③にぼい	口縁部無文帶。口縁部に粘土を貼りつけ厚壁化。地文に波線文 R を用いた單線波線条体直條。	井草	
			③—	—	④口縁片			
鰐5	S-1 覆土	深鉢	①—	②(7.9)	①粗粒 ②良好 ③にぼい赤褐 ④口縁片	波状口縁波頭部。波頭部に中央の凹部にボタン状粘土を貼す。その下に細い粘土を小範囲に貼す。地文に単節 LR の波線文を施す。	大木 5	
			③—	—	④口縁片			
鰐6	表探	深鉢	①—	②(6.3)	①粗粒 ②良好 ③にぼい	斜位の集合波線を波文後に横位の集合波線を施す。その後、其耳状粘土を縦に、豆粒状粘土を口縁部に貼す。	調査 c	
			③—	—	④口縁片			
鰐7	表探	深鉢	①—	②(3.1)	①粗粒 ②良好 ③にぼい	口縁部に粘土を貼りつけ厚壁化し、押型文を施す。その後に三角形や半円形に粘土を削りりとる。	調査 c	
			③—	—	④口縁片			
鰐8	表探	深鉢	①—	②(3.5)	①粗粒 ②良好 ③にぼい	半月状の刺突を複数位多段に施す。	十三普提	
			③—	—	④底部			
鰐9	表探	深鉢	①—	②(3.9)	①粗粒 ②良好 ③にぼい赤褐 ④口縁片	半戻竹管による横位の集合波線を施す。棒状粘土を縦位に、口縁部内部には豆粒状粘土を貼す。	調査 c	
			③—	—	④口縁片			
鰐10	表探	深鉢	①—	②(5.0)	①粗粒 ②良好 ③にぼい赤褐 ④底部	半戻竹管による横位の矢羽刺を集合波線を施す。	調査 b	
			③—	—	④底部			

注: ①同位は「床直」: 床面上より10cm以内の同位からの検出。「限子」: 床面上より10cmを超える同位からの検出とする。

①崩位は「床置」：床面より10cm以内の崩位からの検出、「復土」：床面より10cmを超える②日延・器高・底厚の単位はcmである。現存値を（）、復元値を〔〕で示した。

③胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0~1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。

④構成は、良好・良好・不不良の三段階とした。

⑤色調は、土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳（小山・竹原 1976）によった。

Tab. 6 吉墳・奈良・平安時代出土土器類

番号	出港機械部位	種類名	①口径 ②武徑		③駆動 ④色調 ⑤道存度		種類の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
			①	②	③	④			
1	H-3 土削 塵土	土削器	①8.0 小頭 34.5	②8.0 大頭 34.5	③粗粒 ④良好 ⑤明赤	⑥薄青	口縫部：1/2次粗、外縫、内・外面横擦無。肘部：内面擦無。外縫は一定方向の置割り。底部：平底。	登録番号	備考
		土削器	①— 小頭 34.0	②(2.5) 大頭 34.0	③中粒 ④良好 ⑤灰赤	⑥薄青	口縫部：粗次。肘部：内面擦無、而上位斜位の置割り。中・下位位置の置割り。底部：丸底。		
3	H-3 底直 底直	土削器	①11.0 小頭 37.0	②6.0 大頭 37.0	③粗粒 ④良好 ⑤にぼい橙	⑥完形	口縫部：粗く外縫、内・外面横擦無。肘部：内面擦無。而外縫側の置割り。底部：平底。	登録番号	備考
		底直器	①(13.2) 坏 37.0	②3.7 底直 37.0	③細粒 ④良好 ⑤灰白	⑥(1) / 3	底直器形。口部・体部：内・外面横擦無。底部：平底。内面擦無。而外縫回転式切削部。		
5	H-4 電蓋	底直器	①(17.2) — 39—	②(3.3) —	③粗粒 ④良好 ⑤灰	⑥(1) / 3	天井部：水平から緩やかに傾斜し、底盤前手で水平となりすぐさま下垂。内面擦無。而外縫回転置り蓋。端部：内面擦無。而返り蓋。	登録番号	備考
		底直器	①(25.4) 大頭 39—	②(7.0) —	③中粒 ④良好 ⑤灰	⑥(4) / 3	底直器形。口縫部：外・内・外面横擦無。而青き波波形。肘部以下：丸底。		
7	M-2 塵土 塵乱 瓦質 瓦質 瓦質 瓦質	粗粒	①— — — — — —	②— — — — — —	③粗粒 ④良好 ⑤灰 ⑥(4) / 3	⑦— — — — — —	底直器形。内・外面横擦無。而外縫に指压痕。口縫部に塵荷部のある穿孔。	登録番号	備考

①部位は「床直」：床面より10cm以内の部位からの検出、「覆土」：床面より10cmを超える部位からの検出とした。

②口径・器高・底径の単位はcmである。現存値を()、復元値を[]で示した。

従前の記載と同様、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0~1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特微的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。

④焼成は、極良・良好・不良の三段階とした。

⑤色調は、土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳（小山・竹原 1976）によった。

Tab. 7 石器・石製品觀察表

番号	出土遺物	層位	器種名	長径	短径	最大厚	重量	材質	道存度	登録番号	備考
石 1	M 1	覆土	剥片	4.5	2.1	1.0	9.0	頁岩	良		
石 2	M 2	覆土	剥片	2.5	2.0	1.5	62.0	頁岩	良		
石 3	M 2	覆土	剥片	2.5	2.0	1.5	62.0	頁岩	良		

¹⁰ See, e.g., *Chilean Constitutional Law*, 1999, at 10-11; *Constitutional Law of Chile*, 1999, at 10-11.

①層位は「床直」：床面より10cm以内の層位からの検出、「覆土」：床面より10cmを超える層位

VI まとめ

本遺跡は、赤城山南麓の標高約140～150mの舌状台地上にあり、前年度に調査の行われた「上細井北遺跡群No.1」から大正用水をはさんで南側に位置する。今回の調査から主な遺構・遺物について取り上げ、「上細井北遺跡群No.1」の調査結果も踏まえて、上細井北遺跡群の特徴を考察していきたい。

1 繩文時代

今回の調査では縄文時代の住居跡は検出されなかった。しかし、集石土坑や周堀跡の覆土から深鉢片を主体に多くの縄文土器が出土した。そのほとんどは諸畿C式で、その他に大木5式、興津式など縄文時代前期後半のものが多く出土している。また、縄文時代早期、燃糸文系の井草式土器も出土している。

本調査区北の「上細井北遺跡群No.1」では縄文時代の堅穴式住居跡が検出されており、そこからは諸畿C式の小型深鉢をはじめ、多くの深鉢片が出土した。また、諸畿B式、興津式、阿玉台式、黒浜式土器なども出土している。今回の調査では縄文時代の遺構は確認できなかったが、周辺遺跡を含めて多くの縄文土器片が確認されていることから、この地域に縄文時代前期に小規模な集落が形成されていたことがうかがえる。

2 古墳・奈良・平安時代

(1) 堅穴住居跡

今回の調査では4軒の堅穴住居跡が検出された。しかし、調査区幅が狭いため、住居全体を調査することができなかつた。また、遺構確認面が浅く、出土遺物も少ないため、住居の年代を推定できたのは5世紀中頃から後半と考えられるH-3号住居跡と9世紀中頃から後半と考えられるH-4号住居跡の2軒となった。

上細井地域には古墳時代末期に多数の古墳が存在していた。そのことがこの地域の集落形成に大きな影響を与えていたらしく、7・8世紀の住居跡は本調査区でも「上細井北遺跡群No.1」でも検出されていない。そこで、ここでは古墳が築造される前の上細井地域の住居跡について竈に視点をあて考察してみたい。

H-3号住居跡は竈を持たず、そこから出土した小甕の副部は偏平しており、最大径が副部中位にあることから、この住居は5世紀中頃から後半、古墳時代中期和泉期と考えられる。また、覆土の中層にはHr-FAが堆積し、レンズ状の自然堆積も確認されることから、5世紀末には廃棄された住居跡と考えられる。

「上細井北遺跡群No.1」では、このH-3号住居跡と同時期である5世紀後半と思われる住居跡が4軒検出されている。いずれもHr-FAが覆土の中層に堆積している。その中でも1区H-7号住居跡では床面の一部に焼土の硬化面が確認されており、竈跡の可能性が考えられている。一方で、2区H-3号住居跡では、同じ和泉期の土器の甕に架けられた状態で検出された。この住居跡の覆土にはHr-FAが存在せず、6世紀初頭まで使用された住居の可能性が考えられている。

本調査区東に位置する「南田之口遺跡」では、H-1号住居跡から竈と共に炉跡が確認されている。出土遺物は5世紀後半の和泉期の土器であり、この時期に炉と竈が併用させていたと考えられている。炉と竈の併用の類例では「柏川村(現前橋市)前田遺跡」の1号住がある。覆土にHr-FAが堆積していることから、年代も共通である。

本調査区、「上細井北遺跡群No.1」、「南田之口遺跡」を含めた上細井地域では、5世紀後半から6世紀初めの住居跡が多く検出されている。「炉使用住居」、「炉・竈併用住居」、「竈使用住居」がほぼ同じ時期に存在しており、住居跡の「炉から竈へ」移行する様子を捉えることができる地域であるといえよう。

(2) 古墳

本調査区中央部から検出された古墳の周囲は、円弧となる形状や覆土にAs-Bが堆積し、一部純層があることから、古墳の周囲と想定し調査を進めた。調査区のすぐ南には丑子塚古墳（上毛古墳総覧 南橋村第6号）が現存しており、「上細井北遺跡群No.1」でも古墳を1基検出し、石室の調査を行っている。

上細井地区で確認されている古墳の多くは古墳時代終末期の円墳であり、M-2号古墳北側からは祭祀に使用された後に廃棄されたと思われる7世紀代の須恵器片が出土した。このことからM-2号古墳の時期が周辺の古墳と同一であることが分かった。上毛古墳総覧に記載されている上細井地区の17基の円墳は直径およそ15~20mであり、それらと同規模の円墳が調査区東側にあったと想定してみると、M-2号古墳はその形状から、南側前面部が開く馬蹄形状の古墳の周囲部分であると推定され、今回の調査ではその西側半分の一部が検出されたと考えられる。(Fig. 6)

丑子塚古墳と「上細井北遺跡群No.1」との間である本調査区でも一部であるが古墳の調査が行えたことにより、この地域に古墳時代後半から終末期の古墳が多く築造された様子をうかがい知ることができたのは大きな成果といえよう。

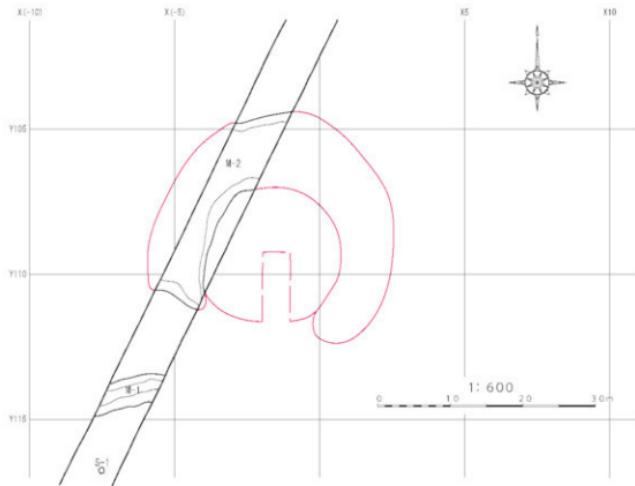


Fig. 6 M-2号古墳想定図

〈引用参考文献〉

- 群馬県史跡名勝天然記念物調査会 『上毛古墳総覧』 1938年
群馬県教育委員会編 『群馬県遺跡調査報告 群馬県の遺跡』 1963年
柏川村教育委員会編 『前田F1 柏川村文化財報告第2集』 1983年
前橋市埋蔵文化財発掘調査団編 『南田之口遺跡』 1985年
群馬県埋蔵文化財調査事業団編 『群馬の遺跡5 古墳時代II【集落】』 2005年

VII 前橋市上細井地区の古墳について

前橋市文化財整備指導員 右島和夫

1 調査成果から類推される古墳の概要

今回調査された上細井遺跡群No.2においては、南北に近接する2基の円墳と推定される古墳が確認された。調査範囲が狭かったために全体形状を明らかにできなかったこと、古墳の端部についての調査のため、主体部が確認できなかったこと、直接伴う遺物がまったく認められなかつたことから、古墳そのものについての具体的な内容は確定できない。それでも古墳として断定できたのは、周堀の形状と覆土の特徴が直接的手段である。

数少ない情報ではあるが、古墳の内容を類推することは可能であるので、いくつかの特徴について述べることにしたい。まず、2基とも円墳と思われる。円墳は、古墳時代の全期間を通じて行われた埴輪形式である。本墳のような小規模円墳の場合は、上縁としては、竪穴式小石室を主体部とする5世紀後半ないし6世紀前半の群集墳を構成するものがある。その場合は、基本的に周堀が全周することと、堀の幅が狭く、両側の立ち上がりとも垂直に近い、断面U字形を呈するものが一般的である。本例は、この種の円墳には該当しないと考えていいだろう。幅広で内側に向けて緩やかに立ち上がる形状は、横穴式円墳と考えていいだろう。2基のうちM-1号古墳は、西側の周堀についてある程度検出することができたが、南西側で堀が収束することがわかる。このような周堀の形状は、石室入口前に当たる南側部分の周堀を穿たず、掘り残すことによって、周堀の外側から石室にいたる土橋（渡り状施設）を作造しているものと考えられる。土橋と石室入口の間には前庭構造が付設されるのが一般的である。

このような周堀は、終末期の円墳の特徴をよく伝えるものである。埴輪を伴っていないことも、終末期に属する推定と矛盾しない。

2 丑子塚古墳について

調査区の南方60mの近接地に埴輪長40mほどの比較的大型の前方後円墳がある。「丑子塚古墳」と呼称されており、以前からよく知られている前方後円墳である。昭和10年の県下一齊古墳分布調査では、南橋村第6号墳として記載されており、埴丘全長44.4mという数値が記されている。今回、関連調査として本墳の埴輪測量調査を行ったところ、埴丘は比較的よく遺存していることがわかった。裾部は周囲からの削平により、詰まっているが、埴丘上部は前方後円墳の形状を比較的よく残していることがわかる。測量調査の結果によると、埴丘主軸を南北とし、南に前方部、北に後円部を配している。からうじて残っている可能性のある、前方部前端や後円部西側を基準として、埴丘の当初の形状を復元すると右図のようになり、埴丘長約45m、後円部径約22m、前方部前幅約27mの数値が得られる。

これらの諸特徴の中で注意されるのは、主軸を南北に取る点である。横穴式石室を主体部とする6世紀の前方後円墳の場合、上野地域の事例では、

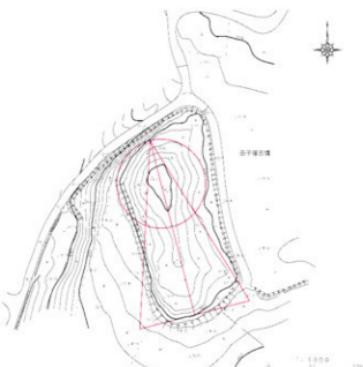


Fig. 7 丑子塚古墳埴丘復元図

表 8

『上毛古墳総覧』に掲載されている上総廿地区の古墳

番号	古墳名	形状	現状	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
一五	一四	一三	一二	一〇	九	八	七	六	五
狐塚							丑子塚		
同	同	同	同	同	同	同	円形	前方後円	同
烟	山林	同	烟	宅地	小祠有	宅地	桑烟	烟	山林
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
南新田	薬師	同	東丑子	桑氣	同	南鬼侯	同	東丑子	上総井
一、一四六ノ一	一、一〇	三九九	四〇一ノ二	六〇八	三一六	三三三ノ一	四〇一ノ一	乙三七九	西廻
烟	山林	同	烟	宅地	烟	宅地	同	烟	山林
一八	三	二〇	二二	二四	三	九	一六	六	三
一二	〇〇	〇五	一一	〇六	一六	二九	二二	〇四	〇〇
様	様	様	様	様	様	様	様	様	様
八二尺	六六尺	五〇尺	六六尺	六〇尺	六六尺	六六尺	五〇尺	六六尺	六六尺
一三尺	一三尺	一〇尺	一〇尺	一三尺	一三尺	一〇尺	前二三尺	後二〇尺	一〇尺
信澤米吉	岡庭良平	金子安司	同	長谷川長七	長谷川長七	内田七三作	外二名	長谷川半治	金井乙丸
刀劍、曲玉、埴輪		埴輪	埴輪	刀劍、人骨	埴輪破片	埴輪破片	金環、刀劍	金環、刀劍、人骨	金環、刀劍、人骨、人骨、齒
宮内省ニ獻上				出土品一部ハ宮内省ニ獻上			明治二〇年頃発掘石器ヲ存ス、入口破損セルヲ以テ入ルヲ得ス	明治二十六七年頃発掘	明治二十六七年頃発掘

主軸を東西とし、後円部を東、前方部を西に配し、墳丘主軸と直交して後円部に南に開口する横穴式石室を設けるのが通例である。例外としては、横穴式石室導入期である6世紀初頭の前橋市王山古墳がある。墳丘主軸を南北とし、南に後円部、北に前方部を配し、墳丘主軸と直交して後円部に東に開口する横穴式石室を設けている。ただし、これは例外中の例外で、他に類例をみていない。以上から丑子塚古墳については、横穴式石室を主体部とする6世紀の前方後円墳である可能性は極めて弱いと考えている。横穴式石室導入以前に当たる5世紀の所産と考えたい。ただし、これと、断定するまでにはいかないところであり、今後の資料増加を待ちたい。

3 上細井丑子塚古墳群の提起

今回調査したM-2号古墳は、地番との照合から、昭和10年の古墳分布調査成果をまとめた「上毛古墳総覧」によれば、勢多郡南橘村13号墳が該当する可能性が強い。当時の現況で、径約15m、高さ3mを有していた。この規模は、高さも含めて横穴式円墳の規模にふさわしいところである。ところで、M-2号古墳や丑子塚古墳(南橘村6号墳)のある丘陵は、西側を鎌倉川が北から南へと流れ、東側はここから程なくして鎌倉川に合流する小河川がやはり北から南へと流れている。この両河川に挟まれた東西幅100mほどの帯状の丘陵には、今回の2古墳と丑子塚古墳に加えて、円墳4基(南橘村5・7・8・12号墳)が所在していたことが『上毛古墳総覧』に記されている。その所在地番に即して地図上に位置を落としてみると、丑子塚古墳のごく周辺に前方後円墳1基、円墳6基が集中していたことがわかる。この集中域の北側に近接する平成20年度に調査されたM-1号古墳と同じグループの中で理解できる可能性がある。丑子塚古墳を中心にして周辺一帯を共通の墓域として形成された古墳群と理解することが可能であり、「丑子塚古墳群」と仮称するまとまりが想定されるところである。

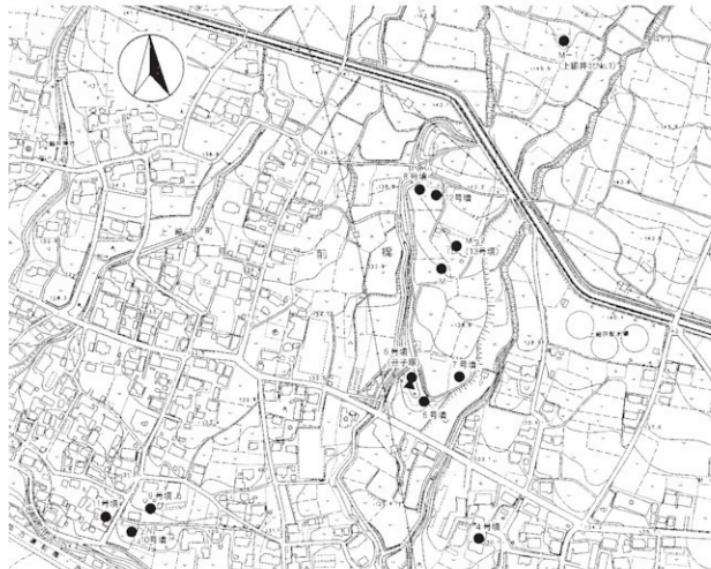


Fig. 8 上細井丑子塚古墳群分布図



Fig. 9 丑子塚古墳全体図

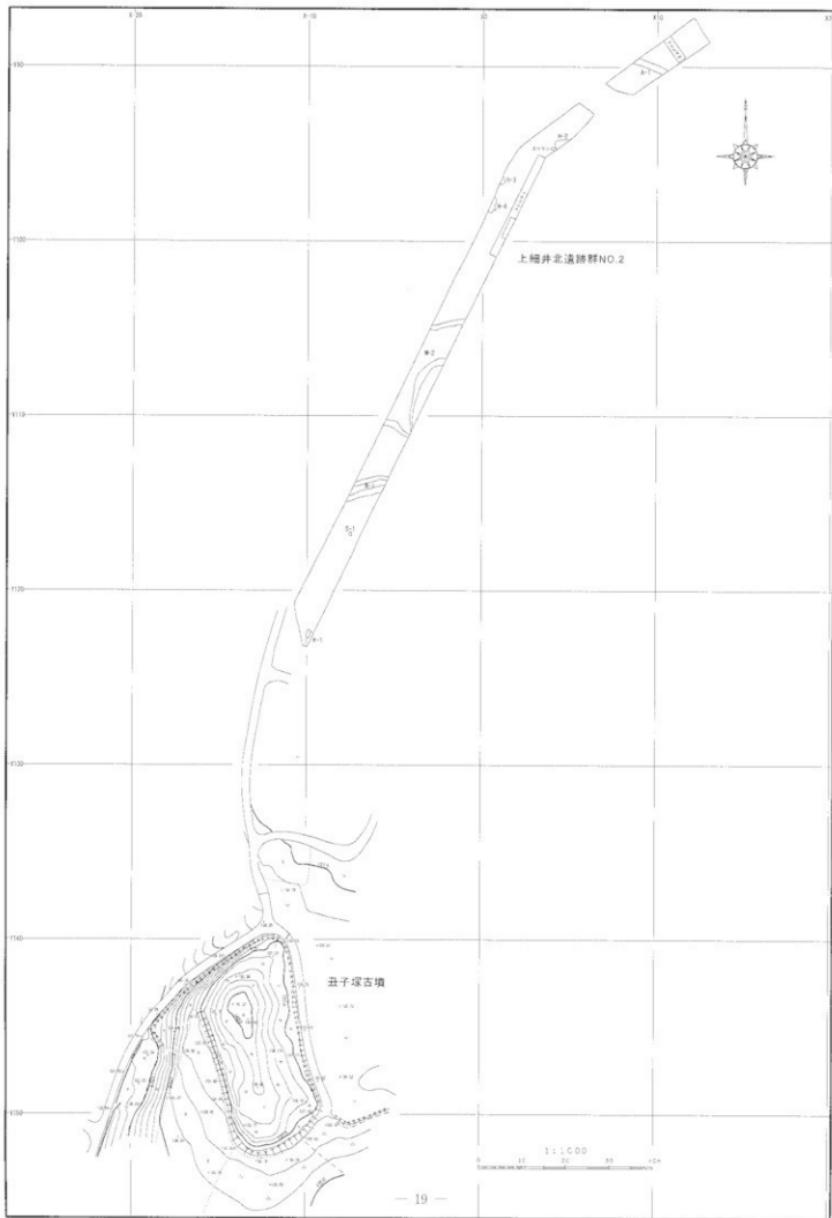


Fig.10 旌子塚古墳と上細井北遺跡群No.2位置図

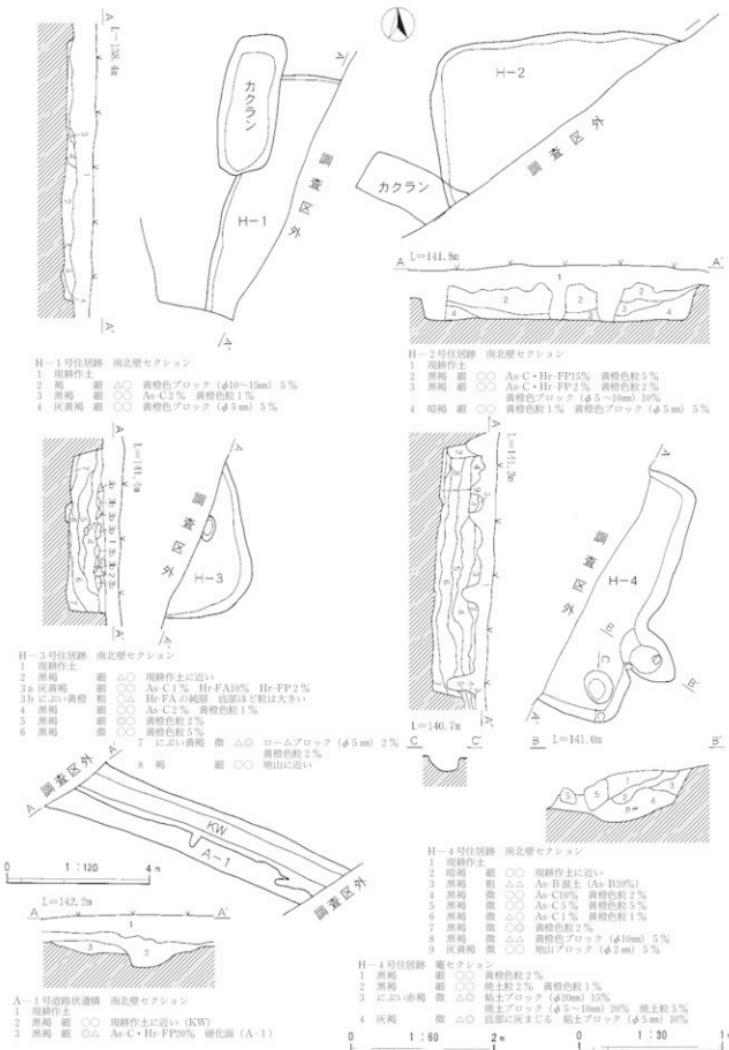


Fig.11 H-1~4号住居跡、A-1号道路状遺構

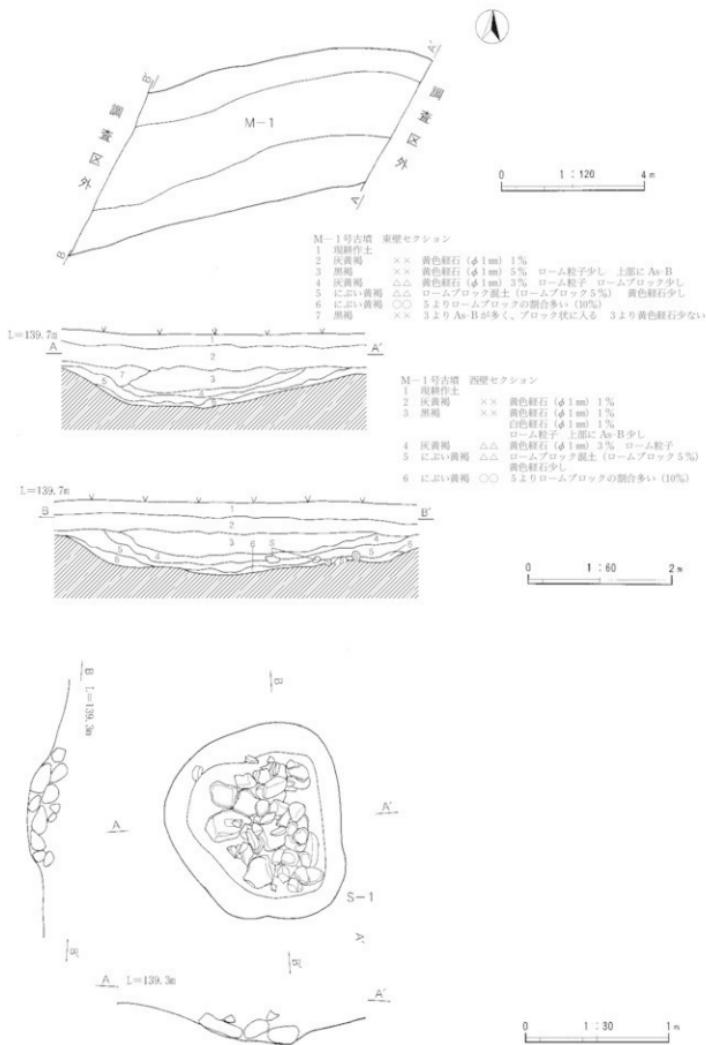


Fig.12 M—1号古墳、S—1号集石土坑

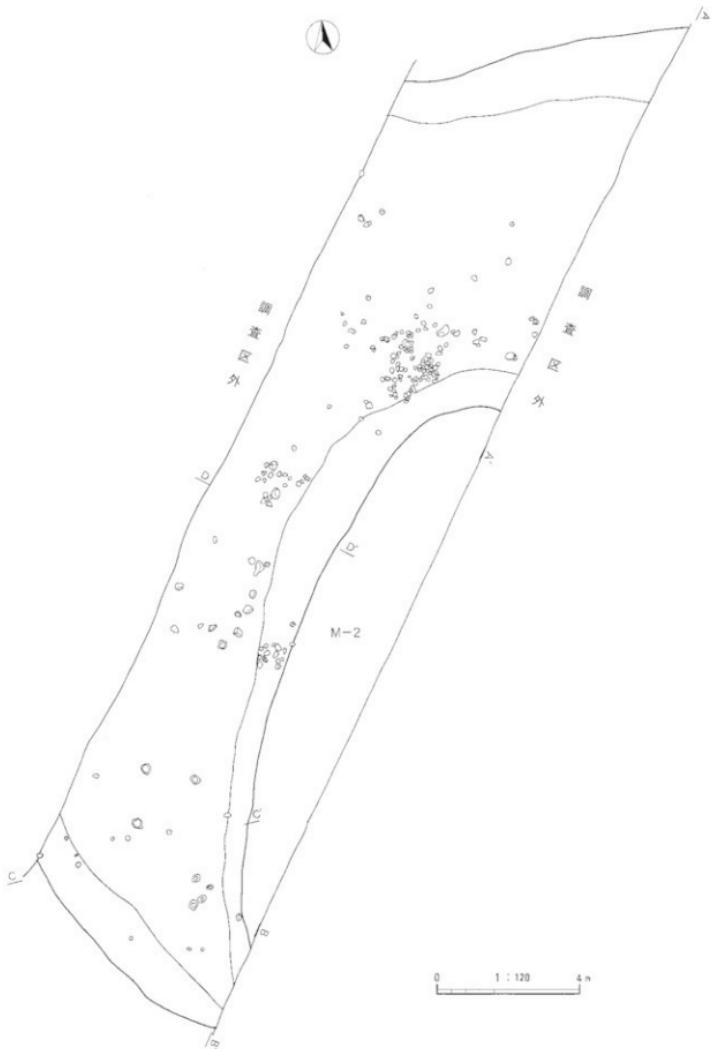


Fig.13 M-2号古填平面图

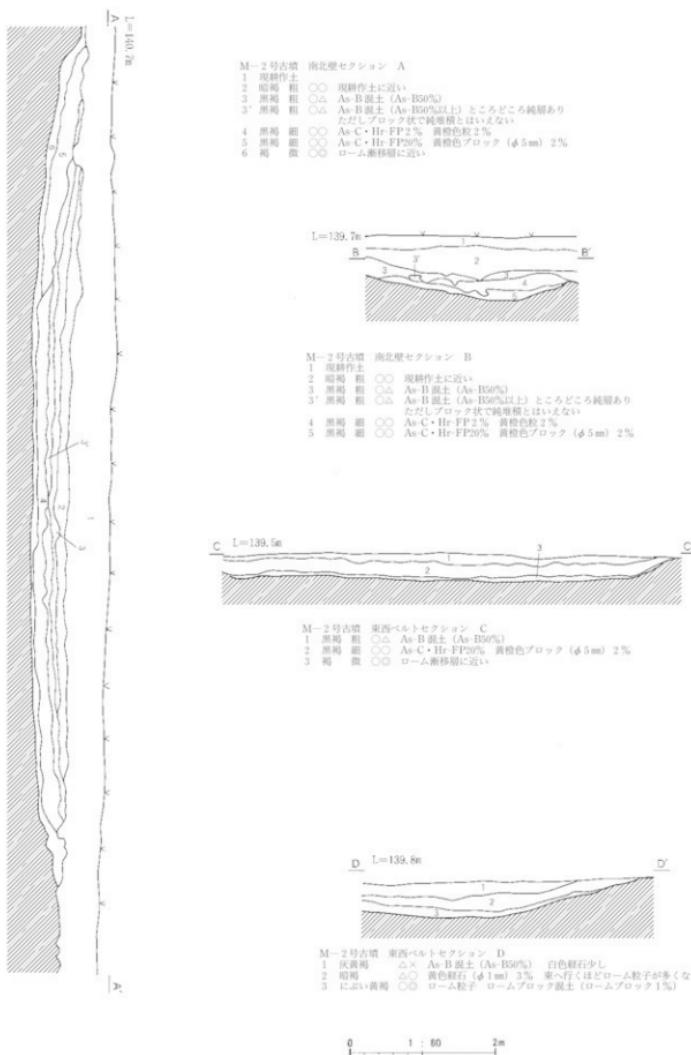


Fig.14 M-2号古墳セクション図

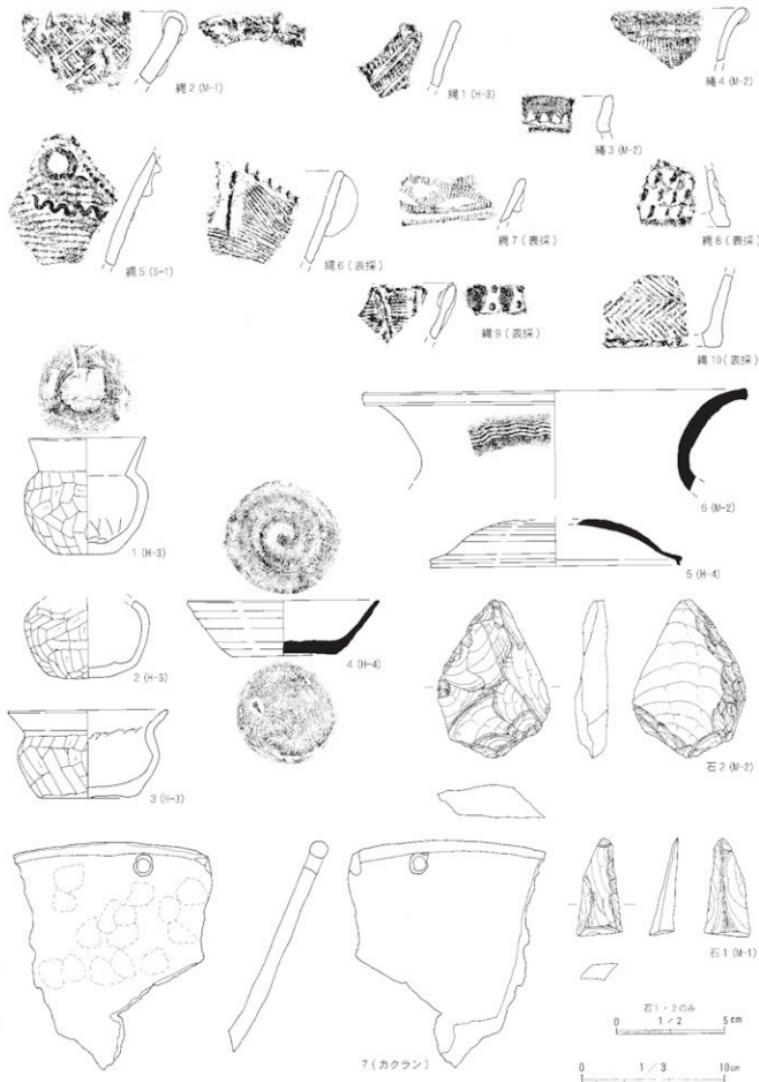


Fig.15 縄文土器、石器・石製品、H-3・4号住居跡・M-2号古墳出土遺物



H-1号住居跡 全景（西から）



H-2号住居跡 全景（南から）



H-3号住居跡 遺物出土状況（南から）



H-3号住居跡 全景（南から）



H-4号住居跡 全景（南から）



H-4号住居跡 全景（西から）



S-1号集石土坑 全景（南から）



M-1号古墳 全景（西南から）



M-2号古墳 遺物出土状況（南東から）



M-2号古墳 遺物出土状況（北西から）



M-2号古墳 全景（南東から）



M-2号古墳 全景（北西から）



調査区北部 全景（南から）



調査区南部 全景（南から）



1(H-3)



2(H-3)



3(H-3)



調文土器

H-3号住居跡 出土遺物 土師器甕

抄 錄

フリガナ	カミホソイキタイセキグンナンバー2
書名	上細井北遺跡群No.2
副書名	上細井土地改良区管上細井土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	阿久澤真一・並木勝洋
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
発行機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	西暦2010年3月20日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード		北 緯 ° ′ ″	東 緯 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上細井北遺跡群 No.2	前橋市上細井町418番地1ほか	10201	21B17	36°25'17"	139°05'16"	20090701 ~ 20100219	1,200m ²	上細井土地改良区管上細井土地改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
		縄文時代	古墳時代	集石土坑1基 古墳2基 竪穴住居跡1軒	縄文土器、石器 他 土師器 他			
上細井北遺跡群 No.2		奈良・平安時代		竪穴住居跡1軒 時期不明の竪穴住居跡2軒		土師器、須恵器、他		

上細井北遺跡群No.2

2010年3月12日 印刷
2010年3月19日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市三俣町二丁目10-2
TEL 027-231-9531
印刷所 朝日印刷工業株式会社